

# 月刊ウィーン

現地オリジナル取材と編集で  
ウィーンを伝える月刊情報紙  
創刊 26 年目  
創刊 1989 年 Nr. 301

## GEKKAN-WIEN 2014年7月号



GUSTAV  
KLIMT

Gustav Klimt  
Bildnis einer Dame mit lila Schal  
Kunsthistorisches Museum Wien  
Gemaldegalerie, Saal XV  
©KIM



# 杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 34



国際原子力機関（IAEA）の技術協力諮問委員会が五月二七・三〇日にかけて、ウィーンのIAEA本部において開催された。IAEAには技術関連部局として、原子力科学・応用局、原子力エネルギー局、原子力安全セキユリティ局、保障措置局、及び技術協力局がある。各局では外部委員より構成される諮問委員会により各局の活動を検討し、その結果を事務局局長へ報告している。技術協力局の役割は、加盟国の持続的な社会・経済的発展の支援に当たり、原子力技術の安全、平和かつセキユリティを確保した利用を維持・強化する技術サービスを提供することである。具体的には、教育・訓練、研究開発支援、関連資格の提供、技術的助言、知識の共有、ネットワーキ化などが主な活動内容であり、他の四局の活動と横断的に関連している。

筆者は、昨年を引き続きこの委員会に出席した。今回の主な議題は、グローバルな科学・政策間のインターフェースの強化、気候変動の評価と適応への貢献、技術協力局プログラムの民間企業との関係である。冒頭、天野事務局長から、技術協力は優先度が高く、新鮮なアイデアを期待している旨の挨拶があった。その後、コロンビアのイエブス議長により議事が進められ提言を

とりまとめた。我が国は米国に次ぐ多額の資金をIAEAに拠出しており、予算の効果的活用、説明責任の観点から国益を見据えた対応が重要と考へ、気候変動への貢献では原子力導入国支援が重要であることなどを訴え、提言に取り入れられた。スペインの元原子力委員とIAEA内で偶然会ったり、知人と会食したりなど、会合以外でも収穫があった。



会合参加者

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の橋について述べたい。ウィーンには二七六もの橋があり、これはヴェネチアの約四倍である。そのうち十はドナウ川に架かる橋、三三はドナウ運河、四〇はウィーン川、更に地下鉄高架部などに二七の橋が架かり、その他は陸橋などである。現在の地下鉄路線は、オットー・ワグナーが設計した都市交通路線を出発点とし、当初から多くの架橋が必要だった。これらの橋は機能的に設計されたが、細部に至るまで芸術的な仕上げられ、貴重な文化財であると同時に、今日に至るまで市街の景観にとって重要な構成部分となっている。プラーターにあるコンスタンティンシュテークは小規模ながら珠玉の名品で、一八七三年に建造される、ウィーンに現存する

最古の橋となっている。一方、京都市が管理する橋は約二八〇あり、大阪市が七三の四倍に近い。鴨川、桂川などに架かる有名な橋が多い。大堰川に架かる渡月橋は嵐山のシンボルであり、九世紀前半にはあったとされている。鴨川に架かる三条大橋は、江戸時代の東海道五十三次の西の起点であり、大正六年の我が国初の駅伝のスタート地点でもある。牛若丸と弁慶が出会ったとされる五条大橋には、牛若丸・弁慶像が袂にある。二四一年に始めて架橋された四条大橋は、明治初期には京都初の鉄橋として注目を集めた。現在の四条大橋のボルト隠しには、御所車をかたどった青銅鑄物（金メッキ）を使用するなど、繁華街に相応しく、近代的な印象の中にも京都らしさが表現されている。両市の橋はともに市民観光客にとって必須の存在である。

余談であるが、筆者はウィーン赴任中、ドナウ川に架かるライヒス橋を渡って通勤した。京都では学生時代から三条や四条大橋を良く通り、現在も朝夕鴨川に沿ってその下を歩いて通勤している。両市の著名な橋に接することができた幸運に感謝しつつ、編集部にお願として撮影してもらったコンスタンティンシュテークの写真に掲載させていたたく。

■ 杉本純 京都大学教授  
元原子力機構ウィーン事務所長 ■